

P-354

HCUの有効活用から取り組む病床管理

高松赤十字病院 看護部

○草薙 照美

【はじめに】当院は入院・外来患者とも前年より減少、平均病床利用率も低下し病床全体の有効活用が必要である。そのなかでHCUは入室数の変動が大きく、平均病床利用率は低いが術後入室予定患者が入室できないことが起こっている。HCUの病床調整が必要であるが、HCUの入退室を円滑に行うためには病院全体の病床調整が重要になってくる。そこで適切な治療・看護が受けられるためにHCUの活用を見直すこととした。

【目的】各部門が協働しHCUの病床利用を検討することを通し病院全体の病床管理を再構築する。

【計画】1. HCUの運用基準（ICU、救急病棟も含む）を明確にする。2. 患者がHCUから早期に退室できるためチーム医療を推進する。3. 一般病棟へのサポート体制を構築する。4. 病院全体の病床調整を行う。

【実践】1. 診療・事務・看護部門が参加したHCUワーキング会を設置した。HCUの現状と問題点を抽出し対策を検討した。運用基準を作成、周知した。2. 多職種カンファレンスの運用を検討した。3. 一般病棟へのアンケートを実施した。一般病棟がHCUから転棟後の患者のケアで不安なことは人工呼吸器装着時のケアであった。今後サポート体制づくりを行っていく。4. 看護部長会でHCUからみた病床調整の必要性について説明した。関連する医師、病棟看護師長にHCUの活用を働きかけた。H23年12月看護研究発表会で取り組みの説明を行った。病床調整会の運用基準を作成した。

【結果】他部門と協働しHCUの運用を検討した。H22年度に比べH23年度はHCUの平均病床利用率・病床回転率は上がり、長期入院患者割合・平均在院日数は減少した。

【おわりに】組織の変革とは「人の意識の改革」である。各部門が同じ目標を達成するための協力を今後も継続することが重要である。

P-355

IT化した医療看護支援ピクトグラムを導入して

深谷赤十字病院 看護部

○柳澤 泉、荻塚 優子、西沢 寿代、関添美由紀、三井 健一

【はじめに】

患者・家族・職員間で情報共有を図るため、IT化での「医療看護支援ピクトグラム」の運用を始めた。情報の更新が容易にできるなどのIT化のメリットを活かした運用をめざして、導入3か月後の運用状況についてアンケート調査を行った。その結果と今後の課題を報告する

【方法】

1. 対象：患者の療養生活に携わる全職員（アンケート配布数392部）
2. 方法：自記式質問紙調査法 各部署に一括配布及び回収
3. 質問項目：「ピクトグラムの表示について」「インフォメーションボードについて」「操作性について」

【結果】

回収率51.5%

ピクトグラムの表示については、「患者の安静度の指示がわかりやすい」（54%）「転倒・転落危険度表示はわかりやすい」（69%）と多かった。ピクトグラムを使ったインフォメーションボードについては「医療事故防止の情報共有として役立つ」（51%）と多かった。

床頭台に設置した7インチ液晶パネルモニターによる、画面の見やすさが表れている。

しかし、「開始してから安心・安全につながると期待できる」（64%）とあまり期待出来ないという結果であった。ピクトグラムの操作性について「変更時の操作はしやすい」は、あまりそう思わないが（71%）と多かった。ピクトグラムを情報共有として役立つとは感じているが、操作に不慣れなことや理解不足から、有効な活用まで至っていない。

【課題】

推進者としてのリンクナースの育成を図り、情報の更新者である看護師の教育に繋げていく。また今後、他職種との情報共有を図るためにシステムの構築が必要である。

P-356

電子カルテ導入による業務改善～申し送りを廃止して～

武蔵野赤十字病院 看護部マーガレット病棟

○賀登亜希子、古川 憲子、藤原 範子

<目的>当病棟では感染症個室6床を含む20床のベッドを有し、スタッフ16名が変則2交代勤務で看護を提供している。これまで朝・夕の勤務交代時には前勤務者から次勤務者への口頭による申し送りを行ってきたが、事前に収集した情報やミーティング内容との重複が生じており、申し送り内容の見直しが課題となっていた。そこで電子カルテ（以下、電カル）導入をきっかけに申し送りの廃止を行い、重複していた時間の削減とケアの継続性の確保を試みた。

<方法>2011年11月より院内電カル導入。情報収集方法の提案を行い、事前に確認すべき情報内容を整理した。電カルでの作業に慣れると同時に得た情報をすぐに記録に残すよう啓蒙活動を行った。2012年3月より朝の申し送りを廃止し、事前にカルテから収集した内容とケア計画の確認を勤務者間のスタッフミーティングとして行った。また昼のミーティング時には患者情報の共有とケアの進捗状況の確認をした。2012年4月からは朝と同様に夕方の申し送りも廃止した。

<結果>申し送りには毎回15分以上の時間を要していたが、電カル導入により2分程度へ削減することができた。引継ぎ時間の短縮により速やかな患者ラウンドが可能となった上、疑問点を前勤務者の勤務時間内に確認できるようになった。また情報ツールを電カルに一元化することで口頭による伝達漏れがなくなり、ケアの継続性を確保することができた。夜勤者は朝の申し送りのために作業を中断することがなくなり、落ち着いてケアを提供できるようになった。ベッドサイドでの記録をすすめたことで時間外勤務も減少した。さらに時差勤務者の増加に伴い、勤務時間の変更にも対応することが可能となった。今後は申し送り時に行われていた教育場面をどのように確保するかが課題である。

P-357

電子カルテ導入後3年間の看護業務調査結果

高松赤十字病院 看護部（業務委員会）

○大西 順子、糸瀬由美子、秋月 典子、森澤 桂子、浮田 清美

【目的】高松赤十字病院における電子カルテ導入後の看護業務内容の現状を明確にし、看護の質向上に向けての方策を検討する。

【方法】平成20年～22年の3年間に実施された看護業務調査結果より、「1週間の業務分類項目別業務量(病棟)」「業務分類項目別に見た時間外業務量(病棟)」「各勤務帯における休憩時間状況」などに着目し、それについての業務量の変化や各部署の業務改善の実際をまとめる。

【結果・考察】3年間を通して、1週間の業務分類項目別業務量について、多少順位は異なっているが、「診療補助業務」「日常生活援助ケア」「モニタリング」の3項目が多いという結果が出た。1週間の時間外業務量については、ほとんどの病棟において「記録」が多かった。その要因としては、入院日数の短縮により入院患者数が多い上に急性期治療による処置に時間を要すること、施設基準を満たすために必要なアセスメント項目が多いなどが挙げられる。そのため、アセスメント能力を高めるために記録の監査を行い、看護記録の基準に基づいた記録の簡素化を図っている。また、記録方法の工夫もあると考え、ベッドサイドにPCを持参することやPDAの活用を推奨している。各勤務帯における休憩時間の取得状況は、病棟全体でみると、業務調査を開始した平成20年には深夜帯約60分、日勤帯約40分、準夜帯約30分であった。翌21年からは休憩時間が従来の46分から55分に増えたことや遅出勤者やアルバイト勤務者の導入等により、わずかではあるが休憩時間の増加につながっている。3年間の看護業務調査にて、全体の業務量及びその内容にほとんど変化がなかった。今後もベッドサイドケアにかける時間を増やし、時間外業務量を減らすなど働きやすい職場環境を提供するために業務改善に取り組んでいく。

一般演題
10月19日(金)